

ヒラドマルナタネ *Pupisoma harpula* Reinhardt

【選定理由】

愛知県下各地で確認されているが、生貝の確認記録が少ない。微小種である上に樹幹に付着するので認識されない場合が多いと考えられるが、それを考慮しても愛知県下では産出例の少ない種である。もともと生息数が少ないので減少傾向は不明であるが、愛知県下では、希少な種であり、主な生息環境である里山や森林環境の開発に伴い、将来的に絶滅の危険性を考慮すべき種と判断される。

【形態】

成貝は、殻長 1.7 mm、殻径 1.5 mm 程度の丸みを帯びたきわめて薄い殻を有する微小種である。臍孔は狭いが深く明瞭に開口する。殻表は、茶褐色の殻皮で覆われる。類似するマルナタネは、臍孔が塞がれ開口しない特徴により容易に識別が可能である。

【分布の概要】

【県内の分布】

東三河山間部や西三河の矢作川流域の河畔林などに主な分布記録が知られる(守谷, 2004; 川瀬・他, 2012)。

【世界および国内の分布】

日本固有種と思われ、本州(中部以西)・四国・九州に分布する(東, 1995; 財団法人 自然環境研究センター, 2010)。

【生息地の環境／生態的特性】

愛知県内での本種の生貝が確認された環境は、主に風通しが良く明るい神社境内の落葉樹(エノキ・オニグルミ)の古木の樹幹で、樹幹には蘚類や地衣類が付着しているとされる(守谷, 2004)。また、同じ木の樹幹に類似種のマルナタネが生息している場合も少なくない。

【現在の生息状況／減少の要因】

愛知県内では、確認例自体がきわめて少なく、減少傾向が確認されていないが、生息場所は限られた樹木なので、きわめて狭く局所的であり、周辺での環境の悪化や開発行為などがあれば直ちに個体群消滅につながる。

【保全上の留意点】

現在、本種の生息が確認される地域の自然環境を維持し、樹木を伐採しないことが重要である。特に社寺林に残る本種の生息する古木を伐採しないことや、本種が確認される自然環境を開発しないことが最も重要である。

【特記事項】

常に樹幹に付着して生活しているため、晴天が続く期間は、樹幹に強固に付着し、そのまま長期間を休眠状態で耐えることが可能である。したがって、他の陸産貝類に比べて、神社境内の様な薄日の差す開放的な環境でも、古くから残る本種が好む樹種の古木 1 本があれば、その木の樹幹のみで個体群を維持することが可能である。

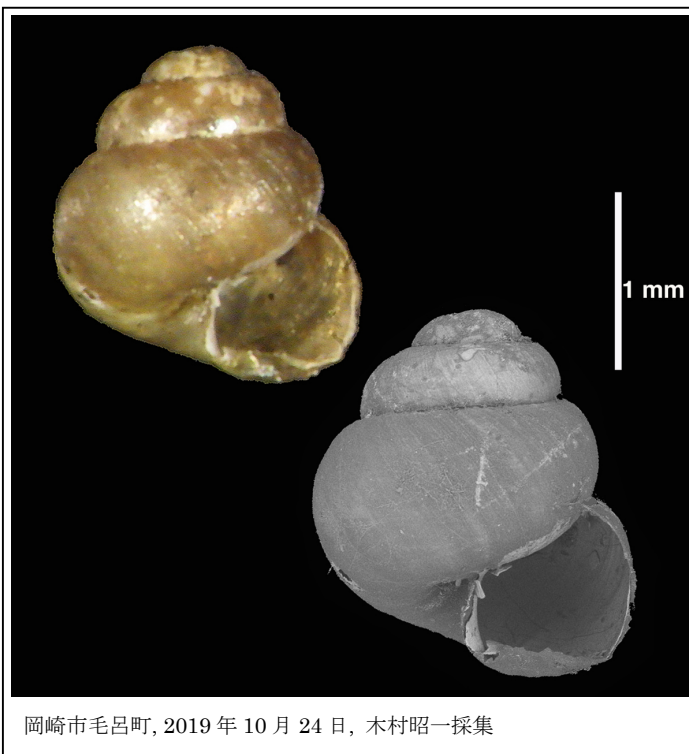
【引用文献】

- 東 正雄, 1995 原色日本陸産貝類図鑑増補改訂版, xvi+ 80 pls.+ 343 pp. 保育社, 大阪.
川瀬基弘・村瀬文好・早瀬善正・市原 俊, 2012. 矢作川上中流域の河畔林に生息する陸産貝類, 矢作川研究, (16): 11-26.
守谷茂樹, 2004. 愛知県と岐阜県で確認したヒラドマルナタネガイ, かきつばた, (29): 36-37.
財団法人 自然環境研究センター, 2010. ヒラドマルナタネ, p.822. in: 自然環境保全基礎調査 日本の動物分布図集, 1070 pp. 環境省自然保護局 生物多様性センター, 富士吉田.

【関連文献】

- 野々部良一・高桑 弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類, pp.23-40. in: 佐藤正孝・安藤 尚 (編), 愛知の動物, 325pp. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.

(早瀬善正)



岡崎市毛呂町, 2019年10月24日, 木村昭一採集